Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

要馬秘極集　十・十一

麻布大学所蔵

要馬秘極集巻之十上

口廻口中之分

唇上下うすく齒のつんあるはんと喰曲

唇上下共に毛れのなきハ川端の曲

なすのハんと喰曲

下れ齒ながらと上齒のごとく

齒上下共に三歳より六歳まで

上の齒のまくあるはあとのまくのようすの如く

上の齒も下のもとすてるもあり又齒なしと云て大疵

上の齒も下のもとも又ツ疵あるハ十齒と云て大疵

齒こうりとうきんと喰曲

ちとらのまき曲

馬糞と喰事勝の病とらのひのぐら曲

膜見れ色喰わるき曲

ふとらとんぴとうづるの曲

馬癖とかわるき曲

ふとたるハ喰るの曲

馬さわらのうくまき曲

鼻かるくさぐりうくわぐら

鼻の穴うくゑるうく

せいらん疵
鼻と額へまく来曲
鼻ひらくさがりかへと食曲
鼻先ふてひえと流るるの曲
下顎の歯持のなくなく下顎ひそ紀ハ人へと喰曲
口の中に朱をうつうごくあり紀ハ河外の曲
ゑりとかんて久ゑとり紀口綫水丸中へ入るくと足をまて加へハ河外曲
斎附舌紙出しいさべまらるハ曲
左右へ切る曲
口浅くさまてさらさへ紙押
口のめく浅くかくさぐく奴うくさまにえすれハふうくさえれうる方
へ切るか押
懐さくてまひ曲
口のうくさまにさすれハ押
口わさくさまて間かけき
どくも孫病眼をまけ強肝と云へば込を紙を乾きらちくとし
口の皮かさくわりくかくさく
りふ曲
うすくありさ方へはさうけるる馬場来まてとも扨
さう方へはさうけまつりかくうひまう曲

為口脇りふ日お用さかへと喰へ紙引曲
わまちて疵
なまうつ疵
わさらく曲
懐さくまへつざるか曲
ちく紙わさ返曲

合三十六八之内　九六八曲　七八疵　三八押へ

間骨之分

間骨先一文字よくさまて角よて骨うとらん紀八人紙喰う
りづきる曲
間骨よりも角よてよるひく
とのくらりさ疵やうなすうハ指と見切る曲
間骨一方ハ緩く一方ハ長くさハ緩くさ方へさ疵く曲
間骨たるさに長くるうそすれハ曲　間骨とうづくるこそすれも曲
間骨ちくまうつまてらんえぐうれハ曲

合六曲

面之分

臭くさのあくさるあうへの骨ぬけ解ぬくさうまこすれハ
鬱さうまこすれハ鬱袋ともこ曲
面の三中の生わるれ筋一方へかくさるうハ切る曲
目合ひろさハ押
てまくハ曲
らぐるハ押
三ヶ月骨緩くらそくあひ
面よりくのわるこそ曲　頸ともぬくあげるこ手押
臆病面色ハあしなぐろさ
血に酔曲　ぬくさとる曲
ぬぐこはるる底　頸ともるる曲
面ぬさぐるる手曲　ありなりくる曲
合十六之内　十曲　三八疵　三八押　ちるか引曲
目毛之分

目毛三中より目鼻れ方へ鼻うすくもあつくもゆ
るるるり曲
目毛三中より目庭の方へ行うすくもありくも
ゆるる手あり曲　目毛悪ようすくもありく
もくくて方へ行一横よ生ゆるるあり曲
目毛目頭ゆくも目庭ゆくもくくくて三中よ行ゆ
うすくも生ゆる手あり曲
目毛悪よありくもうすくくくもまて樋くさるハ曲
目毛悪よ奪くもうすくくくもまて目鼻の方へぐる一横
よ生ゆる鼻目庭の方へくぐる一横よ生て毛ゆる
手あり曲
先のそくる手あり曲
合七曲
目之分

目の下より一すぢ分中の筋一筋も二筋もみる見とをさ
への筋とゝ云押　目くぼれ窩へくろい人紙袋
いつまでもいつまで曲　上目ぶちはとてもかゝりこと
そ乾ハ曲　下目ぶちの下にもくくいつ
ゆもゝ薄くさらけて上目ぶちも薄くと上目ぶちに角ゝさ
ろい人紙袋曲　目縁生ハ絡ハ強くも細く目
と燈ハ薬とちぎくさすにもりて目縁ちいさくなる底
上目瓶ぶちりちへさうふさうにあぶらそゝ切ふ曲
下目瓶并上へさうにあぶらそゝ切ふ曲
上目瓶も下目瓶もうぶくさもりて目瓶のまな
紀ハ曲　大目の出目紀目ぶちさ曲
小目の入目大曲　人見目瓶より并ハ人紙袋曲
人見目瓶より并ハ人紙袋曲　ねとゝんぶぐろき瓶ゆゝ
てねどろく曲　目澄さゝ紀濁さゝ紀ハ底

仰蓋色馬并ハ目濁く目うへをみるやうに并ハ人紙
そゝす曲　目下とゝんろ瓶うよ并ハ人
うゝらとさぶ紀曲　面ぶやくなるハ自紙目へ人
しやくさゝにさの瓶うにとゝうまり底
目角ゝらゝらゝ紀ハ曲　うさわぶりさ皮目根ろ曲
小目ゝもゝ紀目ぶさ曲　大目ゝもゝ小目ゝもゝ黒目
ちいさゝ紀目ぶれく目瓶ゝ　ゝ紀ゝ紀目紙ゝん瓶ゝ大曲
あゝり目并目ゝもゝ大目ゝ　大瓶
目ぶりゝ大瓶　さゝにさ目瓶
名玉学　黒眼常のぶく目縁ゝん　目瓶ゝもゝ人見さゝくゝ曲
目并ゝいとゝゝくいさぶ　目ゝくゝいゝゝ小ゝゝゝ瓶
目ゝくゝいゝゝゝあゝくゝ小ゝゝゝ瓶

合二十七之内　十八ハ曲　八ハ瓶　一八押
耳ノ之分

耳山合高さハ耳先ゑつぼへ曲
耳先向へ耳ゑ計まきあり曲
耳うらく宛たゞのよ之巻まき曲
耳一分ハ長く一分ハ短さるゆあり曲
耳一分ハ之一分ハたゞくまきあり曲
耳一分ハ中く一分ハほそさるゆあり疵
耳長さとすれハ疵
耳先とべてうらへ計分ハんハ紙巻曲
耳の根一すあゆりとゞ合るゆありおどろく曲
耳ほそく先とゞ曲
耳ほそく先とゞ曲

合十三之内　八ハ曲　五ハ疵
平頭之分

かゝゞけとゞあい曲

平頭短くひらさハ押へ

頭ちゞ押へ
ちゞりゆゝ押
下顎短さるゆ大疵
ちゞれるゆ大曲
頬前へ引分ハ前とたゝんへたゞけゆ
分ハ大曲

合九之内　三ハ曲　三ハ疵　三ハ押へ
肩ちゞりとゞ分

ぢゞう肩大疵
三枚骨ゝけてゝべよ巻ゆ
三枚骨ゝけてゝうらゆ押へ
下の肩ゆ角ゝとれハ大疵

押の辻大疵
肩片ゝゞり疵
押へ
ちゞりすゞゞけ事押
下のうゝよへ歩ようさあゞ
後れあの歩のゞりゆ平頭たへたゝゝゝ

ぢをしたがへるごとくにもすべしぢをしてまのぐりくらはんと
胸乃あのまのぐり一分ハ長く一分ハ縮とす曲

合十之内 二八曲 四八疵 四八押

前足之分

ゑりをまりけりの節のまで皮あり口く鏡乃節をもたこ
ぢがゑりにはかくさはくるものを大疵
ゑりあひとまりすりまて廣るてゑりハ押
ゑりあひと廣く地ざいせざく縫付るものを疵
ゑりあひとせざく地ざいのうくぬこ付まを疵
あゑり馬曲
むさうをむくるものを大疵
鏡の節一分ハあり一分ハゑりにはかまを疵の押
人を抱まを曲
足かくさ曲
ゑりうち曲
鏡乃節一分ハたゑた一分ハふ

さまをあこ疵
をあこ所足たるものをあこ疵
れ内よ瘤出る疵
大疵
風をたくまを疵
高疵たるあこ膝しあ膝をはくくも曲
船よのくあ曲
橋切をくあ曲
九すゑ大疵
桐ハ曲
毛出桐を曲
添節疵
うち節大疵
血一方まあるをあよあ
れハ狂押

たくりあ内をあ足たくたるの
膝瘤面よをを後めをあ起月
かくみれ節より下牛骨縫の
牛膝押
搖ずをの曲
むくくみ膝押
をを内曲
かくみれ節より下向の毛生
鏡乃節より下裏節れ毛の
上脇大疵
出毛りの乃疵
よくみ出毛の疵

ちりのまきうて大底
腕巻りてる押
うてえるてるふもとえ
血ちまき高岩の底
よこ流底
い出底るれつまてもえて
皆ちりおの底
ちるこがてふちりの出来
はさ凡押
四ちい凡中の底
ふちり凡押
小凡押
かしら凡押
えるとて出凡とえ

腕のびるてるふ押
流はもりとてはも押
船うぶの出てるる底
腕ち凡ちて出むる底
まぐり流大底
針引曲
氷うの凡大底
大のるる凡押
大凡底
生巻凡大底
猫はあ大底
巻るる凡底

凡うるる凡底
白凡にあ中の底
よこぬりるる底
あるるるぶる底
皆うちずまい曲

合六十七之四 十三八曲 廿九八底 十五八押へ

胴之分

小たけ巻底
ちぐるる大底
物度りうするて毛りて
せだと巻底
縁色るてりて紀大底
紐ずまい曲
糸毛曲

そる凡大底
たてたの口ま底
うる出おの底
合口ま底

胴延るとて大底
物度かりあるる底間
ちるは込曲
海光せ巻底
縁を紀ずまい曲
糸時をんとんすまい曲
糸て揮よ立曲

絶喉曲
越分とすり分ける曲
奈てせとそらまわる曲
外て腐れ振る曲
血色ずれのひ曲

合二十二之内　十五八曲　七八疵

腹之分

あばら骨一分ひとくくさぐる事大疵
鵜腹疵
みぬきよて後ふとるとる押へ
ひぐり後疵
芭蕉毛生毛先胴の分へまろりて毛ふい曲
ろ毛紙毛ろくまのがりしらふ疵
二重皮ちまあぐらぐりまま押へ
一ハ作ぐりの骨皮後ふわくる分押へ

合九之内　一八曲　五八疵　三八押へ

百會ふの尾ひとくの分

矢筈ハ乃迄ハ疵
ひくさ三部疵
片三鞭疵　面三部ふぐら疵
百會の骨ハ作ぐる合のひくと
ひぐ三部大疵
色後疵
尾口ひくるとる事ハい疵
ハ尾口疵
尾ひくあそうぶまとい曲

合十六之内　一八曲　十四八疵　一八押へ

尾筒之分

尾骨長ひとてはい疵
尾ひくの縦ひとてふい疵

尾骨ゆがみたる病
雞尾大病
あを尾曲
半扇尾表病

合九之四　三八曲　六八疵

穴より下穴之分

穴出病
馬糞と一所に出るもの
逆目のもの逆目あげたるもの
めの目片くへよるもの曲
ものゝ骨ちがいの押へ
猿股押へ
豹ちがひ病
鹿辻大病

尾さら尾中の病
れはあ尾大曲
さいくい尾曲

穴出病四ヶ所ともに
股切大病
股ちがひすれ違ひ大病
碁石股病
猿登病

大きん押へ
きんにもの大きい頭の曲
きやのあるもの
なまり病
かるひらかまあり病
ハ押へ
きく付るもの病
辻曲
雁はさあ病
蛇たり大病
曲血病
節より下がぐるもの押
まきもの病
中節より下向の毛生合ものの曲

片きん病
昼遊び時屎たくハ曲
あまだく病
中ひちぐるもの押へ
中ひらぐせぐくすもの
中節一方ハ高く一方ハひ
節長大病
股長すそうしもの曲
さゞり節病
擂合大病
節より下要よ毛押へ
節より下ひゞり骨ありて
擂長一方高ハ大病
中節より下向の毛生合ものの曲

中節あべらひる押へ
合十ゟ面
うら筋大疵
よこみ疵
腕ひかりるこ疵
よこ流疵
猫爪大疵
大切ゟきはめ押
あぐりたる押
一白点の疵
よこぶりゟり疵
合わせ疵
合六十一之内 九八面 九五八疵 十七八押へ
惣合三百八之内 百九二面 百九六八疵 五十押へ

中節ゟ下ゟ爪方の疵
ゟ馬曲
のぐり流疵
腕のびるこゟふい押
流ゟ下ゟゟふい押へ
内交ゟ踏ゟゟ大疵
はさびあ押へ
小はあ押
白爪八爪中の疵
たてぶりゟり疵
あくゟゟ疵

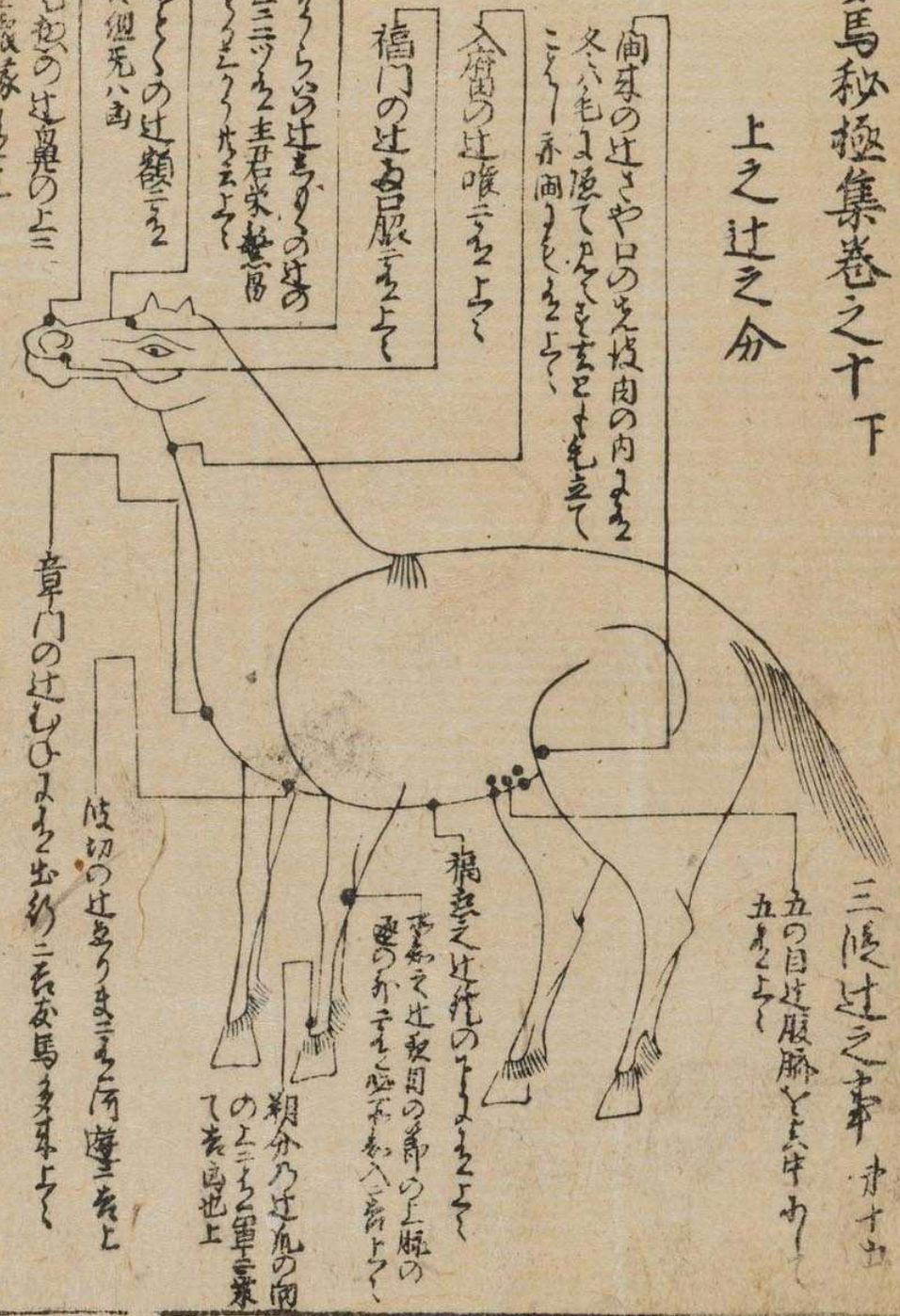
石曲ゟゟはゟゟ
疵ゟをゟゟ石ゟ八十

要馬秘極集巻之十上

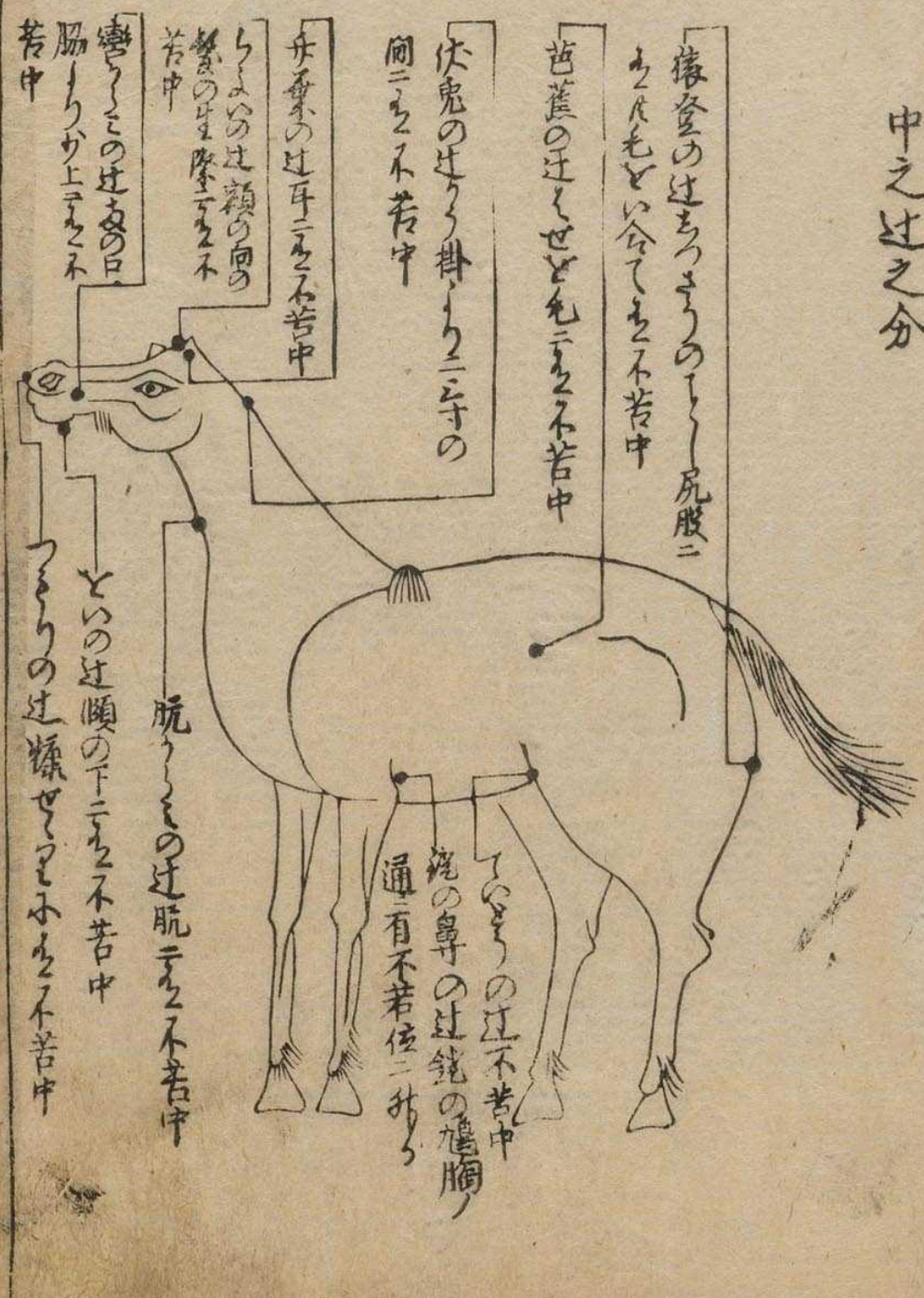
曲疵之巻終

要馬秘極集巻之十下

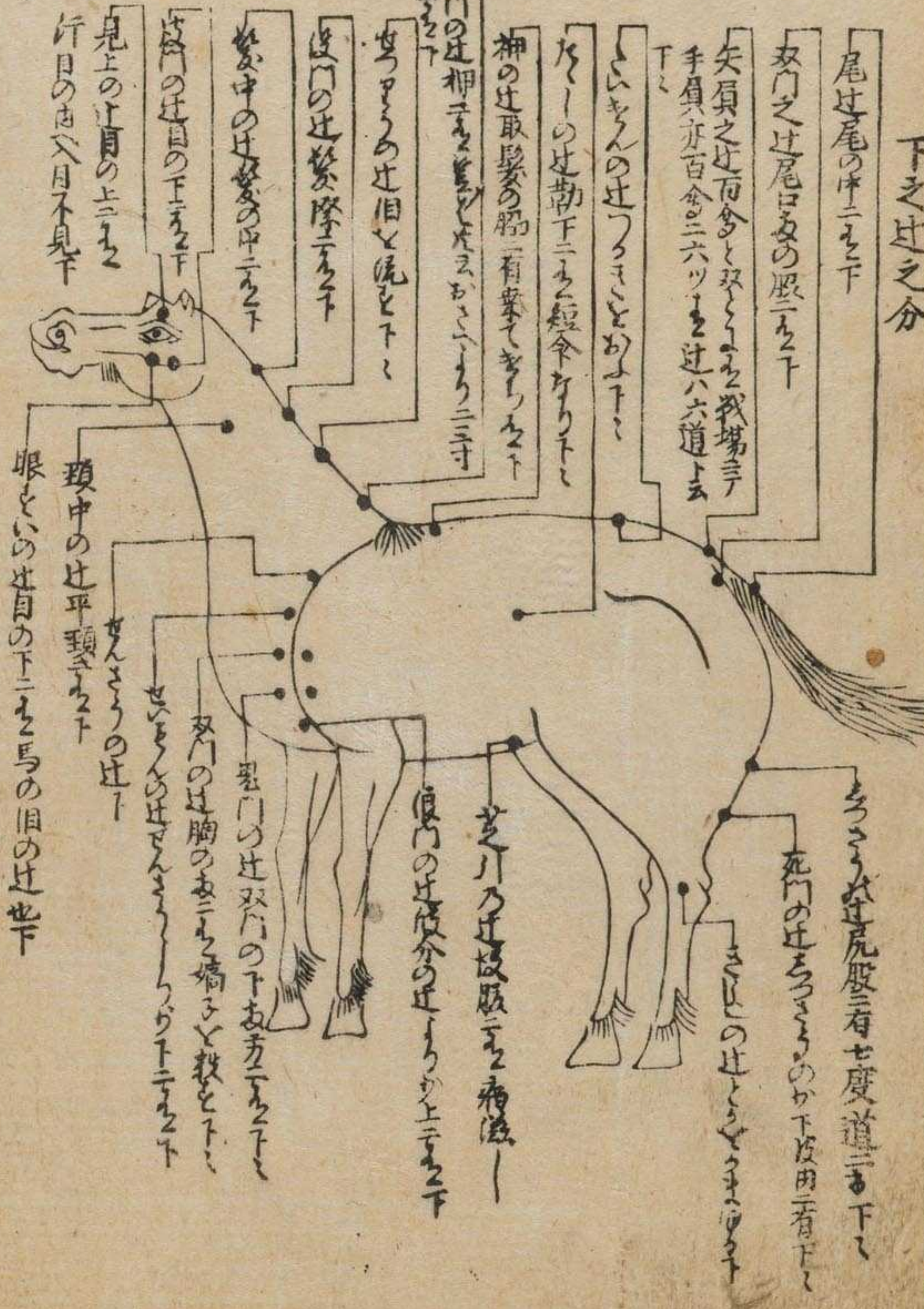
上之辻之分



中之辻之分



下之辻之分



馬善悪之次第　第十六

駻兒巻

馬とらる時𩣺人ハさまを我ちるより二间半隔てかるゝ也
我間と馬の間とるくよ見ハ悲ハゐるりと知べし馬の
間我か間よそむくが口あるくとし知べしとをかちゐより
て見也
馬ひかるゝ時せん尾擲ちかくる總の毛ゆくさちるふ總の毛せんよ也
又歯とかをよそしも下にそもあるを也十歯とは上下たにあり
宛あり行もとも𩣺也
鼻斤さぐりたるをもみる也文宛斤鬚斤鬃をもみる也
目の内の紛しく云ハ眼の内にすくじとおちて其間斗りして眼
縁くあんそうて總毛すかハよき也總管も馬ハ目の内濁也
目上の付きやうに付たる目ハ肮とそろうすゝ也下にゐかりる瞼
よ付たる目ハ翳とさふ也馬をミそみて春するる時一両
半さるきと見分目と也

同片さゞりに付きたる片こたなすもあり片こふるもあり
同のとれひのりあり一のたちるく云て鍛先とりあるとあり
芝ハ縄同のうち表面云肝なりもるんぶとも肝ハ能也とれ
ども中間こんぶべ拾遺のふちのうくもも鍛先能
ちのりうるかい中肝こうべし
月頭さく新ようたさく新と後脚能ぐくうたくぐ
若しうべ綱く濃もハ并うく新こうあ又新ゆにく
九さ代墨新くう
耳片さゞりに付きたる片耳先切もうあるも片耳
付片なびくもあ耳片長頭又片ふく細もあ山間せ
ぐく馬たちすこうあ付もあ耳とあもあ絲
上肝也
面く頭とのつく合とたうに三ヶ月骨ようて頭代くもい
前とあけ代先とれて右頭ようて三ヶ月骨代猪ハ能也

前代下肝て知へし
一の番くうハ耳くく頭骨の間也二の番くうハ肩也三乃
番くうハ右舎也馬代たうあ時先一二三くこ不代見也
脚片ちよ付もあり
脊骨たりくうあ二つあ二ハ脊骨一節よ色うあ
後ゆく紀也一ハ脊骨よ溝のうあハ紀れあり
脊骨前とたりむうたりあ捻のたりむ代せる
脊くうあ又海充よ脊骨の面脇よ肉奪あハ後乗よ
なあ也肉なにハうあらはうあ前ようあ前後たうあ中う
なあ代三脊骨くいあいよ早馬あ也
立あうて面かのうあ代ん内事肩ああ跳能後と
同しやうなあうよ也
前後と肩ハもあくあびよ早馬あ也
りくうあとうあ節とあて付ふ

地道より時前股の繞れ節へるむいらうぬも牛
膝ハ前て後よりふりかもくを馬ましてんへ
前繞ハ足の内片こ大さあるこ片こ細さるこ飛も底こたかさ
節れ続目を義さるかみこ片こたかるもこ出れ節の
内一つさぐりなかもあこ出る内一つ繞さ事ありこ影
中節より下糾さるこ又繞の中脇一方ぐりまさ
かもみこさまこぐも畢ら出ぬ濃ましたるこにるも
あ中脇のまこぐも凡さるこ出ぬ濃ましたるこにるも
は中脇廣くなる彩も八文字より嚙分れぐ後より
繞れるるこ分馬ハ地色こ紙べ但畢鮮あこ足
紙ありこ中ありこ三歳ハ歳まてハ前紙ありこ前紙ありこ又歳
六歳よりて前紙さげこ馬ましたりて出く出
ぐるかも
あ三頭片下りに付色わり足紙片三部こ出あ三部

前へ手こ馬こ分も輝れ馬ハ大者こ分ぬ
尾と接ぬ完馬なりこ約なりこも尾骨紙引見
よ尾前こ力ありてあるこ片内後へるるむい尾と接ぬ
ぬ尾前紙引見ぬ分ぬくるよるくこ力なくあぐれハ必
尾と接も
穴ハこ分も穴も穴の中ハこ出ぬ
穴のへるるハ者出ぬ分ハ悪も然馬の強内少へるるハ吉
ぬこにあるハ悪も
さやれるるかハ繞分命も
内間繞も
上繞ハあるこの骨より出いまいの節こ分く出繞て
内股より内前くせいまいの節こ分節より下出より
もかく嚙迫も出ぬ中より嚙迫小繞こ分出ぬ
嚙分中脇ぬこ出ぬハ一の表れ骨も皮股の糸へ中脇

そのまゝ生れ〳〵と八文字によく繋付ハ乾勝と知べし
膝弱さハめくされ骨よりせいのまいの筋をとへ出遂もすく
肉なく擦股まて出し筋多く付るも悪によろし
又ハ猫の跡足のごとくかゞまる足ハ乾かたと知べし
多き足とて云ハ膝足多くもちよろし悪き也
膝のせいまといれ膝節肉角のあれ方骨の角出て多きハ悪し
太ゐ腸かゝて也丸蹄ハ益落て悪き也
四足への肉一ツ四ヶ所ゟ悪き也馬ほとりして不苦
七歳の馬足ハ少曲ゆるはべし
馬の好みの時前足ハ取よハ膝のうちら丶へ出ると
華化よ出るるれんやら細馬ハ好みてかるれば惣わ
うく前ても久しき足とめるそてえかに根よ肉浮くはし
二ツれ後擦也
二歳腹のふくれハ吉腹の細きハ悪也

二歳ハ馬の形ハ何とも云ふさ見へて大形ハ鹿の首
二歳卧さる時に腰よかゝるまゝそのまゝて記されはよくあるべし
かし
二歳胴の縫ハ長さの分る也明の長いたけのはらのぎ短也
弱馬三ヶ月骨太くして間廣さハ能也
弱る耳長く人もも姿まてられてすなるハ能く
はた耳をはまり馬躰太くされたる也
弱馬なりおかはれどくとも胸鳩鶏すえ出ぬハ
尾そくそれたる也
弱馬二歳の時より足のふとく取ハ吉也
二歳三歳ハ骨細く四肢長く皮掛いふとく落くも落
うろ吉也肝もよろしべし
弱れ時伏兎を折て居て操ハ大早道よ難し
駒るの時膝肢とろしもうとろとみへし三駄ぺし

さけ地際と八文字に踏付をきて艫後より歯八くおちいるなり
剱れ時より骨ふとく皮掛ありさハ余るすじ行也
三歳まて余紙ること樋間もとの曲血を三の血落也
三歳ハ四歳まて所をまことも目の肉ハかくらを持て卒
頸への根あるく海艫の牙擦縮ハ四五歳にかかりて肝出
血れ也
三歳にて曲の衛ありとも紕曲といへとも四歳よりて
曲と出は事もなし又五歳になりて曲と出る事を
なし馬は根ふにより曲と出るを紅筋て何時曲とおへきと云也
駒乃時よくこのめりの是をころさいハ五六歳になりて
もし三頭ひとく死三郎まて患也
開三頭ハ患也但馬よりてゆるす也四枚骨落へる
ハ患ること也
古歯りくすの小ハ小豆牛ニ筋と咬啄絶飼わまこた古歯巻

くさいる也

廐入之吉日

申巳寅亥　申巳寅亥　申巳寅亥

馬躰善悪之歌傳

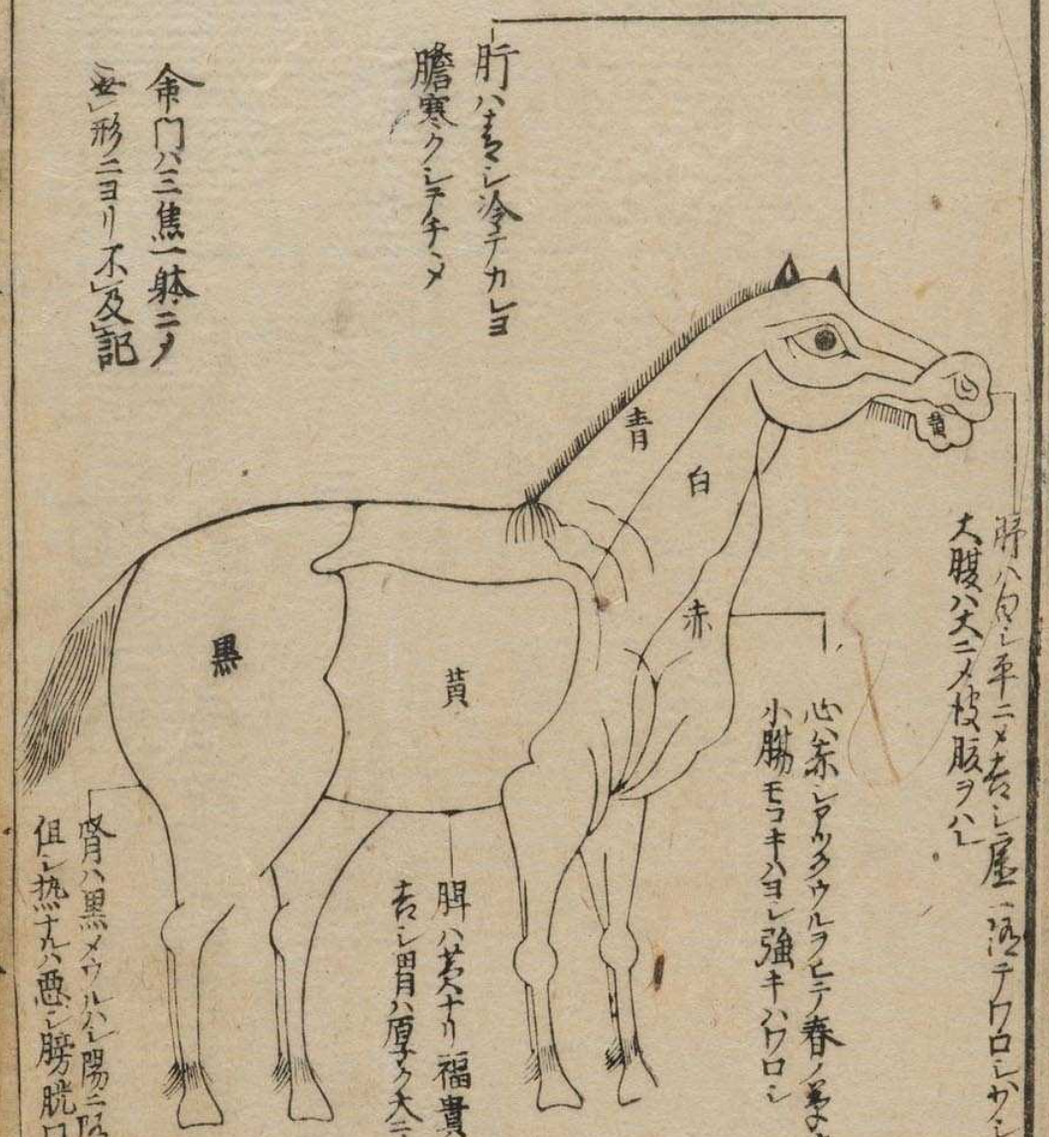
はらは巳て口を滅くを尾をさらして
うしら紙をまうくかぬ中邪ハよし
目はをみて間ほ〇かくつくやさて
山あれ拠く草をらし
蹄取乃居かりまを我をれりてたり
さくをて中をふうしはいふ也
丸らそ〇いろもなくたくはるり
うきハうすく鹿乃頸り絆よ
頸るくく胴をこくかく蒜筋かく
艫乃乱ろるはれめてなりくり

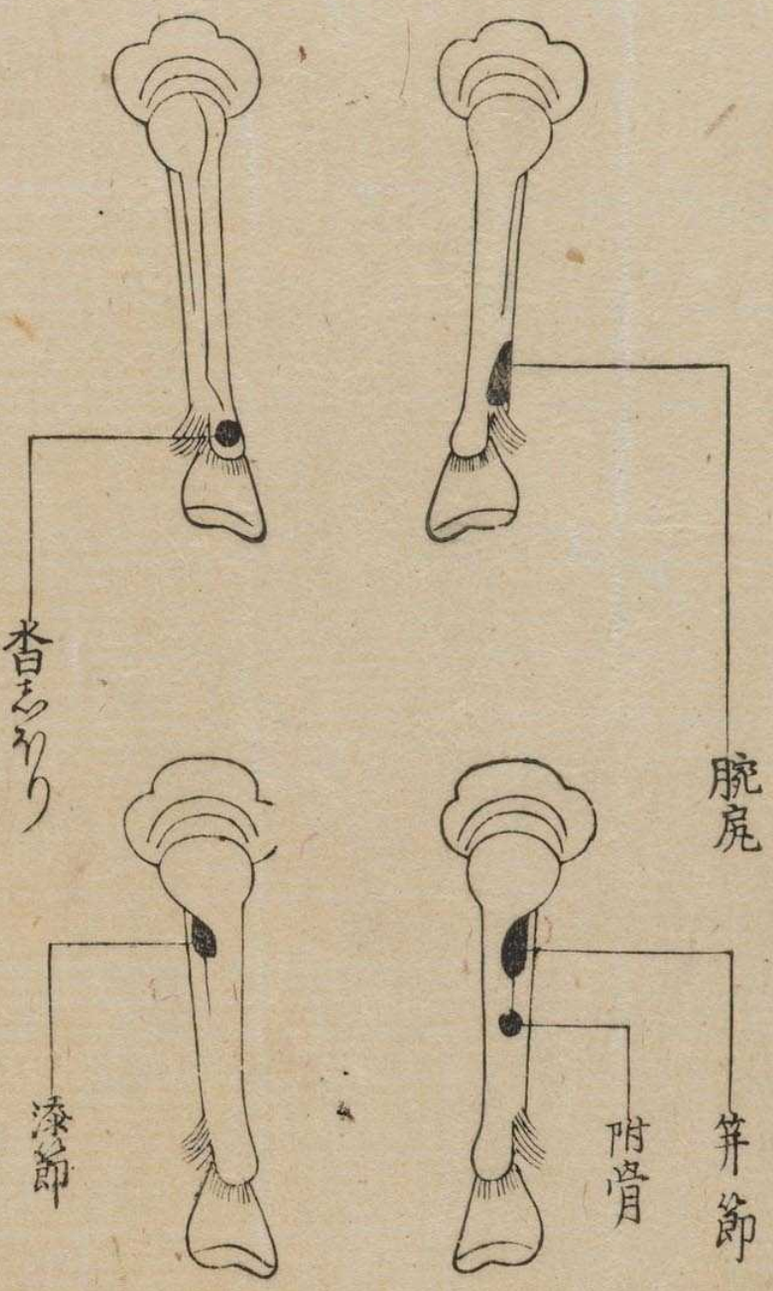
頸はまり脚のうらより茶色なる
筋のさぐれをとらせいのみ
入うちうすくあるもの脚をかるれの
骨はなるべきあるとかるいの
入うちはをとくはけう脚つまり
ひとちいなるべくいやりは使うも
脚むを絲ちうちうすぐらのく三まひの
はのうわひざはらのうちうごてよう
茶色はすぐにしりをて強強く
強ひざはりてうちはよう
逆はのり切をまへへわしを
強色をむうへかくらをとも
百舎より脚ちうさまる骨ハ抱さげて
三部なるさよ尾ちう使うも

同筋より せいまいまてハ悪逆て
筋のひろさうちうの筋乃筋うよ
脛腿腰ちうちうちりくわく二度
切わうまうは絲をさぐまよ
逆馬をかんにはあくに光一に
をけはちりハ馬ようのなと
年腸ち極あいさぐまよ筋をて
ちうはめちうを脚をるてよう
前あとちくちりあけ逆出
筋馬をかくちうてがこよう
あとうく筋あく撫て脚よ和ちを
なぐをあるちう代ちう
使ちりいあもちうすくをちうす
りのはそをとうちいのを

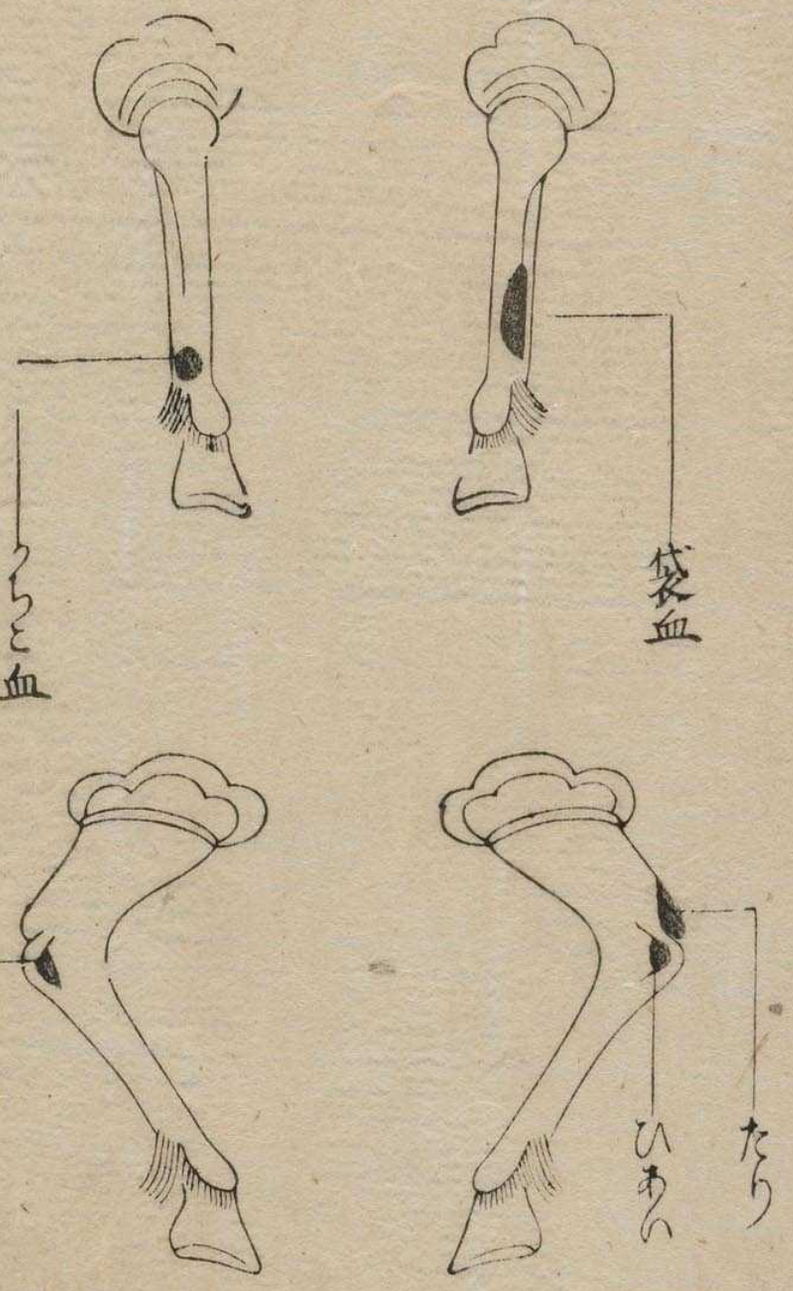
迫出すべし十二中十一よ
二十三とぜ下とも云なり
但陰あるべし陰ぐ多り
六陰遲ちたれ人あり
やりよいまへあり三度頭ハ二度
胴ハ一度よ三度せいまい
七りう糸前あり三度ハ二度
胴を一度よりも一度よ
治馬乃むまを七日のうちもぐ
大ぜいまりて一紙ぐひあ
百曲りうへもちうへもちうへもあまで
もすもをもうへを百よ八十

騰勝影見之事 第十七

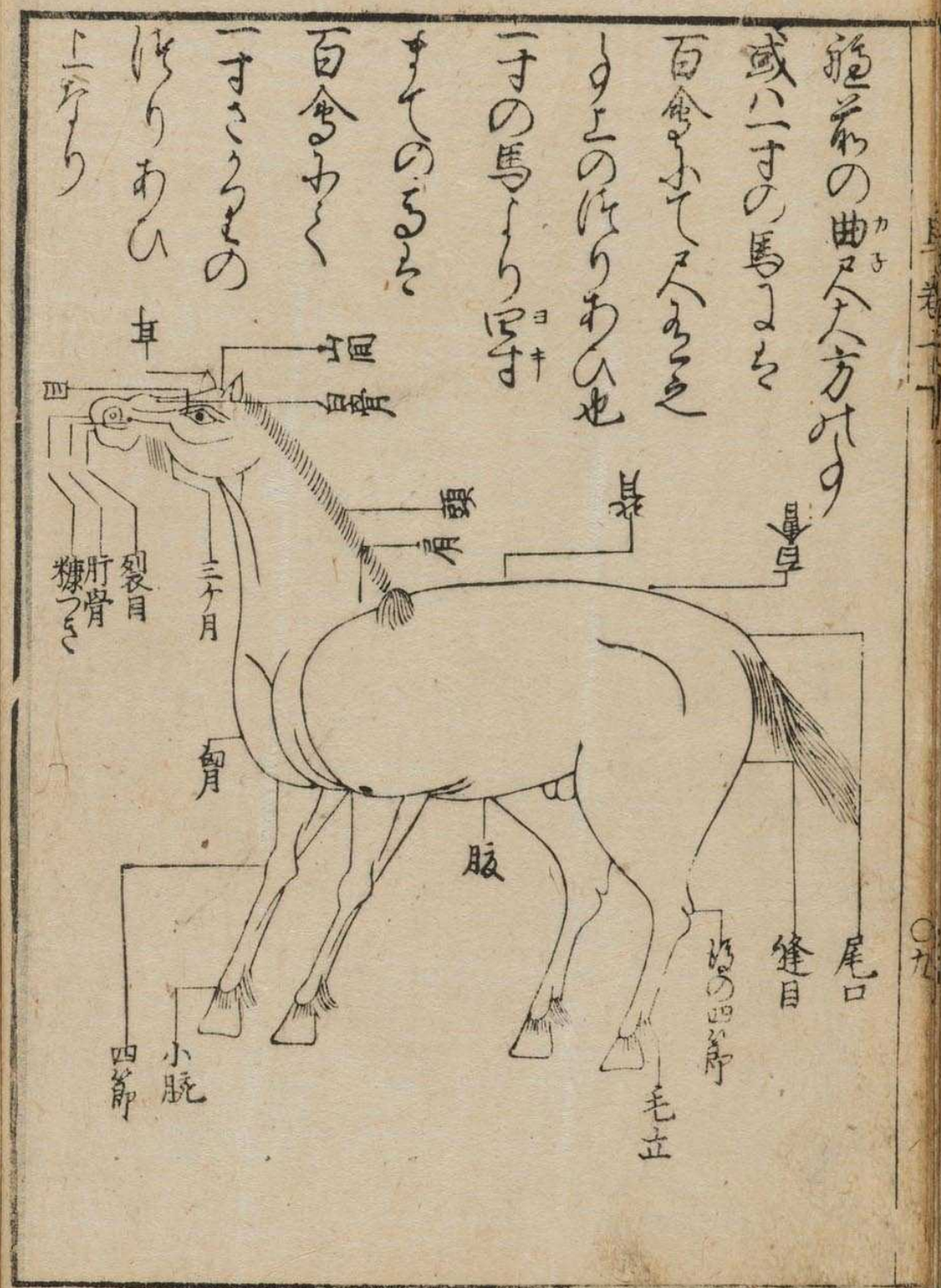




ち膀胱之甲し考混沌初分之後猶可い奇考也



脛を曲尺うく事



一すめ[少キ]さうりとそとすべし立[少キ]すさうりとも也但二寸五分ばかりよりはしりとも八寸ばかりとも二寸さうりとも也お板用す押へあてしひ也口ばかりとも作る

おひしとも糸へく板次第より長[ナガ]短[ミジカ]出[デ]をへ

畢竟作らたさまして肉[ニク]ばく能[ノウ]ばく能[ノウ]ばかりとも作るよめ重[ヒ]紙と掛

縫[ヌ]おひしとも作りとも作りとも四方長[ナガ]さ八六紙

かくしかひとも作りとも二ばかり作る一ばかり生[ナマ]重

ましも七紙と知へしあるよ紙く面[オモテ]肝[キモ]要[カナメ]なり

肝紙[カミ]なる肝骨[ホネ]なるしむ骨溝[ミゾ]ばかり切め浅く作る河

まして眼[マナコ]ばかりをやうわしてまるうしなる或[アルイハ]糠[ヌカ]

とうふ附[ツケ]るく物[モノ]とをれしを糠[ヌカ]とは中[ナカ]よりこと

歯[ハ]と合て眼[マナコ]ばかりをつくるなるあてはかむりのこ

耳[ミミ]ばかりをつくるして右耳[ミミ]とばかりて沈[シズ]中[ナカ]ばかりをの色

れ物にてんうよまん中へ毛ハ山間乃ゆゑ不
及大方ぬけ落へ
頸ハ尾くゝりひきくゝりて下頸ばかりてあれども去
胸ハ鬱乃しものきゝかうゝ
胴經さうゝ
腹ハとのまてきゝかうゝ
百會とれ中と去の行とあしめたるらくゝう
縫めはきゝきゝかうゝ
膝筋ゑさうゝ
股大さかうゝ
但節うゝきゝお經さうゝ
小うてゆうまさゑうゝ
ゑりあひのまて大さよゆまさたうゝ
地乃ゑれうまへの脚付六すかうゝ付一

天はとかうゝ
ゝうひゑつうかうゝ
めうはさいうゝ
馬と川越うゝ河ゑれ一方脚出ゝ或ゑたゝ乃あ
ゝ出ゝそゝへ背くゝ
ゝまゝこれをゝとゝかゝものゝたゝ同ゑゝ口強ゝ或ハさ
辻ぬいめたゝ一方へゝりうゝ松ゝて脱くゝあり
口ゝくゝさゝ眼を法へゝんうゝ
ぞゝくゝはひうゝくゝゝうゝ
耳ゝゝへて尾と四まゝへ入腹ゝゝあけゝうゝくゝ
或ゝ是ゝて腹ゝうゝ尾ゝ
大曲ゝりゝゝ
面ゝれさうゝんて眼ゝ
乃下に肉かれゝへゝゝ

ゝみゝゝん一方へゝりて目
ゝゝへ

あらう目と知へきもの眼のうちに光りあるもの眼のよく及ぬ人のさしもりてはんろう耳
とてもあるとも能やめ毛うあり眼おとあるものよ
ものとなるとあるかぬ云ふらあるもの方と耳とてさくやう
よすりのせいしんやうちもりて目よさうはしふた
きくあとありけくんろくまもくたるもの

秘傳因付之事　第十八

同堅撰股太山事
太山毛明惣まちりたす　拯躰数百さう
鞍下三乃事
肝と面ゆくんろ心腎乃事
たくさん武蔵校用集よんたくさん
毛毛孔毛くりあるふる新しよ依く拯躰乃毛短くたやる
てかくよ鹿の毛乃ちくたりたくさんのちく

拯へ一命なるものくん拯かして新鮮しいさ毛ちくさ
義のれはあるたもくと紙て秘密のけんやう各別乃利ち遠
て武蔵校用集よりの的なるもの

耳小根一握　頭長　鼻要寛　能行三百里
臆前雖周備　服臆腹須平　頸長筋骨促
鹿耳天然快　僂頭第一強　蹄軽腰亦短
鼻上紋王字　目中青暈侵　雖然有筋骨
近看雖似小　遠望都成高　要知深有力
蹄大蹠又軟　腹闊腰更長　行時無歩驟
口浅不能食　眼深多咬人　猪膝難任重
要知有壽馬　唇美口方停　好是如羊能
不在如龍狀　追風號古来　目前毛骨験
解立四蹄攢　尾骨短為精　伯樂亦稱良
更要汗溝深　腹上逆生毛　何必問強陽
雪堤致遠行　駬良壽亦長　未可比駑駘

要馬秘極集卷之十下

射見之巻終

要馬秘極集卷之十一

五觀動之脈之事

入脈　外脈　沉草脈　骨動脈　鶴遊脈

入脈とゝゝハ一動よりゝり二動よりへ出す白の脈也

外脈とゝゝハ一動よりへ二動よりゝり変腫物の脈也

沉草脈とゝゝハたとへゝ水乃色ふ草の葉の動うごと

しゝ筋病の脈也

骨動の脈とゝゝハ折骨代ゝゝ附羅の脈也

鶴遊の脈とゝゝハ一動よりゝり二動よりへ或ハ本脈よりハへ

つゝ脈不定とゝゝ是ハ代病の脈と知べし　但変化よりハ

しゝ大熱脈也　雖色変ハ少ハゝゝり病

血脈八道之事

浮脈　沉脈　石連脈　竹筋脈

代脈　麻促脈　芤脈　滑脈

浮脉と云ハ脉筋とみれバかろくなでゝみれバ按てみれ
バ指と押返さるゝ熱の脉也
沈脉と云ハ脉筋とみれバ細くみれバ按てみれバ
指の下弱くたゞとくうすれハ寒の脉也
不連の脉と云ハ脉筋と押さけてみれバ脉筋
つゞかずしてぬくんで絶々につゞく絲引やうにかすかにして瘡の脉也
竹筋の脉と云ハぬくんで竹を破て細き血筋の
内よりあらはれ指の下に大く法筋ある脉也
代脉と云ハ上みても下みても半分浮脉半分沈脉也
是ハ二日病の脉也
麻促脉と云ハ押てみれバ指の下挙らざる也必
七日の内に死ス口傳
乾脉と云ハ脉筋みれバ細く指の下絶し是ハ皮
肉熱し髄寒なるべし

滑脉と云ハ脉筋とみれバぬるく／＼とみれハ押てみれ
バ指の下より上し是陽瘧の脉也

七傷之事
寒傷　熱傷　水傷　飢傷　飽傷　肥傷　息傷

寒傷と云ハ冬の内宿水を飼て寒さを冷り立所に
依て是を付すれバ病馬の毛かれて一粒を不結也
熱傷と云ハ夏の暑気に当りて時ならぬ草を
飼に依て是をすれバ病馬の咽乾き後にハみぢ
かき也
水傷と云ハ業なくして則ち飼をへて濁胃散乱して
後ハ大腸の上結となる也
飢傷と云ハ大に飢させに依て急に糠草を飼に依て是
をすれバ病馬の腸に熱塞て糞まろく渋て後
に結馬となる也

飽傷とゝいハゝ草秣喰ふて息ゝるゝげるゝ俊と勤ゝ依て足ゝ成るゝ病御法水深緒馬となるゝ
肥傷とゝいハ馬肥ゝるゝゝ常にのゝずして合とゝふ
ゝ依て足ゝ成るゝ病後ゝ惣身痩ゝ成病となるゝ
息傷とゝいハ馬ゝいあてゝらゝふむゝ敷てゝゝ喘息い
まゝ不定ゝ糠草秣ゝふゝ俊て足ゝ成るゝ後ゝろ
ゝゝとゝいゝ病となるゝ

八邪之事

風邪肺　寒邪脾　暑邪六腑　湿邪腎
飢邪肝　飽邪五臓　労邪心　俊邪肝

風邪肺とゝいハ肺ハ皮毛と主ゝ風邪ゝ入ゝ成ゝ
風邪痢とゝ史
寒邪脾とゝいハ脾毛ゝ成るゝ寒ゝ冷の類ハ陰邪史
ゝゝ又陰ゝ成ゝ寒ゝ属して脾といゝ史暑邪
六腑とゝいハ五臓と陰とゝて六腑と陽とす暑ハ陽
けなゝ故ゝ陽ゝ属して六腑ゝ入ゝ史
湿邪腎とゝいハ湿ハ土ゝ属す腎ハ水ゝ属ゝ去慰水
の加ゝ湿邪腎とゝ史
飢邪肝とゝいハ飢ハ草ゝ入ゝ不足ゝ故ゝ足りゝ
ゝ沈ゝ不足ゝ沈ゝ故ゝ飢邪肝といゝ史
飽邪五臓とゝいハ飽ハ水穀草甚ゝ多ゝ故ゝ五臓と
いゝ加ゝ飽邪五臓とゝ史
労邪心とゝいハ心の汁ハ汗ゝ心の
液と労ゝ成ゝ故ゝ労邪心とゝ史
俊邪肝とゝいハ肝ゝ久ゝ成ゝ行ハ則疲
と痲行ハ筋ゝ成ゝ故ゝ俊邪肝といゝ八邪也史

馬ゝ業鋼陰陽邪事

風寒暑湿ハ人ゝ子の病ゝ受ゝ陽邪陰邪事

気と治せよ
飽飽労役ハ一潮の病也陰陽受まで陽業あて
気を治せよ
馬病者より病の源を知るを根本と察して病ゆる
書ハ歩と見て察〳〵愈ハ出入息を以て相應おき
と思て生死と知ると出入息を以て病を知ハ一
日一夜よ三万六千一百三十六度の息也ハ一時よ三千十
一度の息也歩を以察ずと云ハ十分よ満てハ必死を分
よせめて之時ハ甲乙乃歩よ陽りて歩行くまて
毛皆うを哪能を神惑紀勃揺〳〵精力をくを紀故
と思て也大すくを変ずを云とも十分よ為ずて必
の内風気を以察〳〵病の根本を以知て命と考ずて云乃
李よ病馬口中とん内よ毒ありハ病ゆより出る治しゲ

しゲ王分の猛と炎ゆ為く毒変して野ありハ下治腎水生
木也変して但ありハ肝治金慰木也
夏の季よ病馬口中赤ありハ心より出治しゲ王
分の猛を以炎ゆ為く毒変して毒ありハ下治木生火也変
して毒ありハ肝治水慰火也
秋の季よ病馬口中但ありハ肺より出治しゲ若
変して黄ありハ下治土生金也変して赤ありハ肝
治火慰金也
冬の季よ病馬口中黒ありハ腎より出治しゲて
若変して黄ありハ下治土慰水也季の下旬よ病
馬口中とん内よ黄ありハ病脾より出也治し難
若変して赤ありハ下治火生土也変して黒ありハ肝
治木慰土也
春三月甲乙木証乃病馬大切也

夏三月丙丁は火徳の病馬大功也
土用は戊己は土徳の病馬大功也
秋三月庚辛は金徳の病馬大功也
冬三月壬癸は水徳の病馬大功也
甲乙は肝の経より發脚は膽脚也菜は酸味とす味
して辛ゆさ物ふうさ物芒三味ゆ菜とも其さ物
辛物は欲味也
丙丁は心の経より發脚は小腸の脚也菜は苦さ物と
甘味として酸さ物其さ物は用ゆるさ物は鹹物と
欲味也
戊己は脾の経より發脚は胃の経也菜は其物と本
味として甘物さ物は用ゆるさ物欲味也
庚辛は肺の経より發脚は大腸の経也菜は辛物と
の代味として其物さ物用ゆる酸さ物はゆさ
物は欲味也
壬癸は腎の経より發脚は膀胱也菜は鹹物と本味
として酸さ物酸物は用ゆるさ物は欲味也

第二

五病若死生死之类

五病悪相の事

馬脇鳴鼻すぢ馬形大寒として間絶息しさ
ひとあらはる水流るくは必死
鼻すぢ鼻より黄なる水ながるるは死
尿結歯とくいたみひとあらはるるは死
内羅頭の内鳴鼻荒く皮脇よりあら草食うとき用
うさより鼻あらさは必死
伏瘡再發の時内羅鳴出さは必死
五病吉相之事
馬頻よ煩く云た脇鳴馬尾伏さすは治しやをし

白馬熱よハんまうハ治しやすし
屎結頻よ煩ふといふとも腹鳴目上りて身ふるひするハ
治しやすし
肉羅久しく煩ふといふとも皮腹さがり鼻の内まで洩ぬ
ハ草どうとまざるハ治し難し
摩緒の悪瘡数多ありといへどもぬる草をもつて喰火焙
ハ治しやすし

病馬生死之事

病馬治しがたくハんまうの時よりだんだんやうやうとうがいの
ことよ三つ程用て少なくて食物かほどかはりなきにかほど
甚しきハ必死とそかほどかはりなきハ大切なれど療治よう
かりがたくべし就中荒馬ハ用て分別也
病馬何病にても久しくわづらひ後身に治して傷ふ
わうくるねそなまる事なるべく三七日の内よ察す

て死とそなきもの也
病馬作病成共前腹のきやうすをひろげにおいて
まれ治ることなるべくにつれ持つハ又目の内よ死口傳
病馬何病みても歯と唇とくちびるおのれてさがりて
うごかざる時ハ其日の内に必死口傳
病馬何病なりとも薬を用て後相応不相応と知る事ハ
まづ薬を用ひざる時の馬形息ね観勧の脈態
考し見して極用て後息ねあづからよ観勧をとくとや
かならず時ハ其薬相応と知べし又用ひて後息相観
動も荒くなればハ不相応と知べし口傳

滅後の治薬の事

病馬一切気力薄くなりぬすけ平馬よ成てハらいなる
この邪病を除く何病にても大切よ及りて本薬の土
分一ほど薬を加へ用べし薬よハ

さいうん　まひし　墨焼　干姜
各ホ分めしてゆうげのうしろに形めしては合薬のうさ
往加へて本薬とともに用史

曲馬薬方之巻　第三

留息丹

大蜂　三両　蜂とうるて他うげうしめしてを用
天南星　三両　たらび　二両うけうしてを根を
唐檜　二両半　甘草　一匁

右細末して猪の油まして練りて合蜜と少加へて練るべし
毎日用ること息眼ふくこは目の自由不叶　耳の根より
汗出五体ゆるい心の思ふ所ふるく人咽馬或ハ例より乳
ちぢひ人とよせびるよわりざるるよ用ふい方いるべし
いつ形をわら馬ありもるもてへ所不叶ものとるべし
毎日用て後日ほうしひ金華丹を多く用ふべし馬

加味留息丹

天南星　大　唐檜　小　大蜂　大　たらび　中
ふと鳥の腸　中　大すると　大　水銀燒　中
麻仁　中

右細末して猪の油まして燒合大逆の曲馬よ用史

息教丹

大すると　水銀蠟　麻仁　ふと鳥腸

右細末して練小分密とゆて練猪の油加へ丸
又大逆の馬ホ用ふ

加味息教丹

ふと鳥腸　大　水銀　小　大とると　大　大蜂　中
わさびと　大　とらび　中　水銀蠟　中　石見川　中　墨焼
秘薬

右細末して猪の油ゆて燒合大曲馬よ用ふ二方ハ或ハ
薬ど毎日又ハ緩急ずるひの馬よひ与ひのるにより

よくもりこをけずりこを曲襟退をべし〻紙を俵て不切
みして馬を用事不可有者也

・敎益散

ちくりうを一両　牽牛子一両半　麻黄三分　巴豆巴西

右細末して茶の服より石菖蒲の百曲をのもるを用
よ二錢八度より五箇銅べし〻大遲の百曲をのもるを用
えば後より鍬力より引茶をもて撰用をれば二度發汗と
云ふ形し但肉ぐもるを紙包方をして緩退せざる馬よハ一夜銅紙をくもちら蒸
より胡麻の油成二ツ銅てをて後引茶紙あてゝんで移次
て寧如也引茶をハ

大すうを　ちらび　ふと鳥腸

ホ分みして猪の油あて煉合　鍬力　三論細　躰教
并鍬　ホより引て日ホ〻付をよかつをろく紙蒸て

をを汁と引乾さる所時ちくに所也茶方の往復く紙者し
てをぶし〻紙をを紙慶の勘へなくちて用之事
あやうき事也或ハ茶繩ををて口をを紙の間ハ伝

金華丹

櫻花日ま〻一両　金薄一分六分　擾實ちけり〻八分
山茨菰　分　五倍子半両

右細末して生姜汁よくすりてもろく練り合煮と
こめ二七日程ををてかるを時密をを加へ
練り合ををく也諸毒紙はけを也勢の方こ

三親丹

樹三両　寒の内より茶をを少る日より寒の水を
熟地黄一両半　七日の内はけてハあげひををひををげをみて
牛膝三両　生　黒焼をを　芍藥一両
牛蒡半両　黒胡麻三両

右細末して、まづくさわめほどの内よくしらべ、或ハくゝさ
わめよ茶り合せの一服程わめを鍋に入、蜜を加へて湯
煎して、よくとけるほどに茶り合せ、さましても用
ひても呪ほどなりけ気ほどけめ曲乃むかしけんまほ
つかんまゝ系ハ直方新用集にあらりと

心調散　大曲馬に用

牽牛子　一両　水銀焼　三分　巴豆　二両
まちのさの　半両　石見川　黒焼半両

右細末して卵にて一筒に二銭入、七筒に用口傳

正益散

人参　一両　土虫　黒焼　二分　小黒焼　二分

右細末して一日に七分程づゝ、あま皮目ほど肝弱の馬に肝盛
にしてゐるをすみやかにさほ程用て三日程ゐるとて肝よ
及びて程ゐく右の通するべし。若口力よくバ三虫黒焼
あらりて用ふべしくあゝひ何よも肝弱の馬よくり妙なしも
口力お強くんべき事なむらくなるべし口傳

精心散

六味五八草　一両　土虫白手　半両

右細末して下肝の馬に雁化蜜にて煉てとも日所程まで
とも多く用申まで馬肝により絶気にあべし又云ふハ
らく草紙不可綱

白益水
土亀　黒焼　一両　鶏の粉　二合　黒胡麻　一合
耳冷水

右細末して耳洗めくおりうまるときわめ出て煉合肝
弱強程にも雁心徳めしてあり候ふ也

耳草細末して二両耳酒めて程りうまるときわめ
其耳草一味のあさうぶいのて煉合程馬に用ゐ逆

心を穏和してうりくんひろめよ依て弦曲うれしの所
より第一の秘訣史に伝ル

三虫之方

女の髪の灰　ホ三天　馬蠅の灰十二天

右ともに合てうるの毒口わりさいわりて潰ばしまとべし
口わりさいわりめよ後て潰ばしたるべしく口力強く
ろう史一虫秘訣授用集よんこうり

黒油の方

馬蠅の灰　一歩　ねぐいも　五両

右ともに合黒胡麻の油ねりて煉合うし沈少加へ毒の口わ
らにぬるる史同く口力とぐらくく強くろうなり

輭心丹

黒胡麻　二両　熟地黄　半両　唐の芋の粉　二両
白朮　一歩　石見川黒焼　一歩

右細末してとろろあわもて煉合味道の馬より黒くろる心
丸和し紙包とぐむる史

人虫丸

大延秘方一尅相傳肢の病中風脚病打身五淋病尿閉
治る虫より右糸曰息相伝病ハ右飼汁口伝

人虫　二ツ　龍脳　一両　柱蔞根　一両　草拖　半両
井草　一丹　水金　二朱

右細末して糊ようふのうち搗合　毛孔より怒ぐ蒲
粉と練ようけ七日ケして病馬ハ宮と用の飼汁より
心得わるべし

飼汁之事

肢の瀾ハよい　鬱金と蒸熟
中風ハよい　ちくたくと蒸じ用
筋癒ハよい　ちくたくと蒸じ用

赤身ヨハ　花見紙ヲ用テ湯ヲ用ヒ
尿結ヨハ　木通ヲ煮テ用
結馬ヨハ　排水ヨハトキ煮テ用
息ヨハ　藜蘆人参ヲ煮テ用

病馬經見

一卧而不起筋骨痛
難移後脚腎經痛
咬歯低頭心經痛
喘急不調肺經痛
急起急卧脾經痛
口吐清涎脾經痛
跑胸咬臆膀經痛
蹲腰踏地胞轉痛
抱前抱後傳經痛
腸鳴泄泻冷痛
垂尾行大腸痛
捲尾行小腸痛
小便淋瀝胞經痛
右十三點有如斯標本心肝脾肺腎五行相尅與相生飢飽風寒労役甚驅馳飲喰失調和感損傷寒熱併鳴呼瘖瘂不能言後学普心仔細認

粮意散

細鳥の羽を焼て腹中へ村ヲ汁へかけてめて焼
焼ける時ハ湯めくこと粉ヲ七
分一加へて万ヲ煮ること
煮て煮て或ハ煮て煮
やむやうにして又ようう
又ようう様に皮を加へて煮べし又時ハ

粉にして煎じ飲べし

六味五八草の事

黄蜜にて丸にして酒にて一丸宛加みくしの頭尾を切てうらけの面に黄草にて

草　篠茵　帰耳草　帰耳草ホ名

黄草灯盞草よハ　黄草灯盞草ホ名

色てよろしくハ草よハ　黄草

うけをとかうけのみくしてもこめも右又

草にて方よりけて黄草

つ焼ゆ　諸食にてくすけ又蒙とうるもの

り粉にしまいこ二十丸　藍漬也

血草散

一五月五日ハ黄毛馬ハ蓬にて銅て其黄三両

黄毛馬の血ハ村毛と一丸のくてかして粉めて

五両　桔梗一両　名細末にして万病うるハ水にて飲べ

白ハ分紙色ハ用ゆ

潜馬ハ桃ハを蒸して飲べ

てもこ口ハ黄ハ依て飲べ

色脇ハ胡麻紙物ハ

べ　姫塩を加へ

寒紙病ハ酒ハ

撫病ハ

飲べ

白羅ハ石蒲を酒ハ

ハ依てうるハ　飲べ

骨折ハ

大石ハ

ハ

柳と粉ハて骨ハ

黄よあく　干姜と物ようて分右の黄ゆてよくもまさ
てそとそとそよに影ゆ手用と物ゆ一日に二三度ゆ
小後ゆ行ふくべ馬ゆ水ふさとそう事ゆくべに慰手
用ゆ水ようゆ行り御合ふて分ゆ史

四足平用之分

活蔞根　かつもの根　加

右ホ分ようそう合ゆ行ゆ加ゆ日ゆの根ゆ分ゆ史
馬ゆとだゆ或ハ茶ふゆ行ゆ分と手ゆ薬逆ゆそう
まゆりゆゆとれゆていふゆくくまゆわり薬逆蔓よゆ

びやくだん　ちやうん　杏仁　くちなし
ぢんこう　ふう

右各ホ分ゆ行ゆて冷水ゆて用ふゆ史

延息丹息相万病ゆ

人参　茯苓　辰砂　桔梗

朱砂　香附子　麝香各二分　延胡　沉香　丁子　良香　丹草各二分
胡椒一朱　竜脳二朱　金薄五十枚

各細末ゆて煉蜜ゆく煉合一宿ゆ置て用ふ史

飼汁之事

筋乳ゆハ　馬血の根と細末ゆて一樹ゆ茶三服程
と酒ゆく半分水ゆて半分二ゆ代一つゆて夫用
ふ一度ゆ行ふ

結馬ゆハ　但水ゆ部とうて匂べ又ハ冷水ゆて
も匂史一粒

芒硝ゆ丸し一粒ゆて下ゆ史

金沓一切之裏痛ゆ用ふ

鹿角黒焼　一五丹　鮎勝　羅　一五丹
女の髪の黒焼二丹手分　鉄のやすり粉　五丹

右細ゆて猪脂とわくふうゆ松やにと天のくゆ合

つけ附右の粉薬紙へ塗てつくハ猪の脂に又蕎(モ)に
飯ハ松脂にとへよく煉(子リ)合せ後(ノチ)水にあげれあげる
ぎんせん一匁

一切の癒(イエ)薬(クスリノ)之事

まなこひゆまりだらよてをりをうさをりと
右だい又脂此をいひたるをはよくをりまぜ置きの
めざうやうめして百日をきて取出して粉(コ)にしてひ
粉りうもよし雨もよりで皮の油(アブラ)にて粉りても付
るに又人油(ユ)にても粉りまして置りひの内ハ赤(ド)銅(コウ)の肉まれ
て合さる　万病(キン)各等分

玉(キヨク)明(メイ)散(サン)

とら　まこべの黒焼(名草)　赤貝つとめうちひそうひ　一切の眼に用

黄(ワウ)栢(バク)　うえくうり　うきさと用

右各等分粉にして　うつぎの葉しぼりこ粉して汁にて

右うくとるにてうし牛絡めにて馬乃目とゆなて水にかつ
けりやすき又

一 背(セ)ぎりの薬之事

牛(ギウ)皮(ヒ)黒焼　大(ダイ)頭(トウ)黒焼　各(カク)等(トウ)分(ブン)

右細末にしてひ粉りうるきとすばかりの汁にて付てもよ
付よし

血(ケツ)足(ソク)散(サン)

血乃道(ミチ)すうりののう　かうし　世うむし　塩(シホ)　白(ハク)黙(ラウ)　各等分

右能くとり合粉にしてをき血のあるよにひろくきしぎ

路(ロ)馬(バ)薬之事

牽(ケン)牛(ゴ)子(シ)一両　大(ダイ)黄(ワウ)一分　射(ヤ)干(カン)二分

右細末にして粉にても塗(ヌリ)ても一滴よ一表へ一分よ
七角匁ぐし

淋(リン)病(ビヤウ)薬之事

菖粉 一分　木通 三分　干姜 一分　夕顔紙 二分

右網ニて酒ニて一合ニ一度ニ入一度ニ五合飼べし

虫脇草之事

陳皮 一分　黄蘗 二分

右酒ニて胡麻四ツ半分ハ炒半分ハ生ニて

味噌四ツ　塩四ツ　生分　生ニて合ニ煎じ

湯ニて用ひ熱ニ煎じ

草ニ一合ニ一度ニ七合飼べし

内羅茱之事

人参 二分　茯苓 一両　干姜 一分　陳皮 一分

右網ニて酒ニて一合ニ一度ニ七合朝夕

七日飼べし

瘀血草之事

地黄 一分　黄耆 一両　牡粉 十匁　嵐糞 一分

牛膝 一分　拌麻 二分　人参 二分

右網ニて酒ニて一合ニ半匁入一度ニ七合朝夕

七日飼べし

腫物数〻草ハ事

巴豆　五心草　夏草

右ホ分ニて加ふ方の油ニて煎合樫糸二寸ニ分ニ方

ニ切て右の草ハ細ニ切ひめ丸ニ丸ニ紙ニ包付

て一ツ〻ニ脇の邊の腫れ物ニ付

付置べし或ハ鍼ニ手首の血ニ出ス

付ニて血ニ付て付べし

腫れ物ニ付ニ

関節之草方

生姜ニ一ツ毛ニ去皮ニ刻ニて

ニ一ツ〻ニ味噌汁一鉢ニ煎て毒ニ

擂鉢にてよく〳〵味噌汁にてのべ餅汁にてもよし
茶湯ハ
黄栢大　牽牛子小　さいゝ　丑焼小
右細末して大の絞汁にて下餅也
温茶にて平次第
干姜を可炒末　干姜七錢よりてのちとりて
粉にして一錢加へて作るよし
胡椒を可平末　胡椒の粉とを葛にて丸し行の得
よへりてのちに三錢ひとつ後ろ作るべし
紫蘇葉可炒末　欲湯よりとりて一服ときて後
のべ作るべし
巴豆を和よ可成末　巴豆を二つ皮と二つ皮
てとりよりとりて紙よりにて後
毒抜べし　右作ときて大寒の馬汗温抜附大海六勝

内陽熱炎にて心に掛りて苦附出ハ茶にて与ぬ
もぐさを八湯より熱にたらす也
寒茶可炒末
指葉根を和ふ可成末　小後ハ分酒ハ分　塩八分合
てうるをの一服をとる常ハ
堅塩を可炒末　胡桃のうちと粉にして堅塩ハ
分よ合らるのうちと黒焼にして合ハ
て炒ると後胡桃のかちを生
時よ湯にて搾ぬ
熱強さ時馬乳或ハ大海六勝寒さ
ハ時入て可飲也

黄栢散　治泄瀉
黄栢炒一丹　串拐大ハ一ツ　餅米炒粉二分
茯苓五分　そぐの粉五分

右細末して酒あて飼ふ

白朮散中郎に秘したる飼

人参　干姜　熟地黄　桂心
大黄各一両　白朮　二両

右細末して馬に依て飼ふべし

明通散　浮佐馬に活す

牽牛子　一分　朮通　一分　椒白皮　一母
宿砂　一分　大黄　一母　干薑　二分

右細末して椒白皮を煎じて汁にして一箇に一度に
一度に七箇可飼馬に九箇も飼ふ

内損薬之事

串柳　三ツ　宿砂　二分　木香　二分

右細末して酒にて飼べし此薬は四月の腸大

腸にてこなしくやうにして紙にて
あつくつゝみあぶりてとるとき酒損やいまはあ
はぐるに薬にて酒にて飼ふ胃の緩砂をもて必離
腹鬼にくるやむ也内損にて
不の食則下り喉にはいりすゝめ
ものく

癰節薬之事

温石　石見川和各二分　白朮　一分　沉香　一分
木香　一分　訶梨勒　二分　蒼毛馬血　一分　人参　一分

右細末してあつき茶にて飼べし此薬は馬にてもつゝ
紙にてつゝみ紙にて
鬼鬼出しあつくんでんしめ則ちより
年ちかくなり程あつくなるとき
有ものは病ちぐさに乳血にて
病馬心得の事

何馬ともなく煩病能治すべし
事肝ぶ泥面よりは卵を
有事をしらべつくべし病の
しるし病癒りもつくべし
て是を治すべし落

鬼相ふくべ葉の事

茹草　三色　沉香　白朮
人参　石菖根　塩硝　梅干肉
小黒焼

右水分細末して消毒包瘡のくすりあるいは色を付成ハ
軍馬ともくすりとすべき時節ハ是を付重べくすり
もの也

鬼養散　萬病よりの
桃白皮　茯苓　白朮　良香各一両　桔梗

澤瀉　仙人草各半両　威靈仙一両

右細末して万病のくすりに用ひ
飼汁乃法

寒病ハ
熱病ハ
瘧馬ハ
尿瘧ハ
疥腫ハ
瘡中ハ
すくすハ

酒にて用ひ
せくるぶし氷又ハくすの汁にても用ひ
桔蔞根　牽牛子とかへ澄まして用ひ
草蘚　瞿麥とかへ用ひ
木香とかへ黄柏と煎じ汁にして用ひ
そくの粉とかへくすり加へ用ひ
白芷　芍薬とかへ松のみどりと煎じ
汁にして用ひ

羅ハ
源瘧馬ハ
牙関ハ

人参　仁丁子とかへ酒にて飲べし
牛膝　瘧病に煎じて用ひ
虎の膽とかへ味噌にて煎じて汁

また可御虎のごとしいあり毛ある
ものも
毒脫除 桂心と加へ酒にて飲べし
筋病みハ
茅根 蘇芎の三遍と加へ冷水にて用ゐも
人參 馬蓼乃事
唐檜 天南星 是ハ水分ゑ細末にひづちの茅ゑ
て俵ものゝ酒にて飲べし又乾漆ゑ入れても二七日
飲べし是ハ男女共に七日或ハ二十七日にて治すを心得
だるべ遍くゑ三ゑ入れて治ゑくゝ一日乃用ゑ影
多もちゝ紅ゑんだるものゝ絲
ゑ草ゑ車前水ハ絲ゑくゝ入れて毒
抜をとる繪ゑ入れ物
馬秘抄集巻之十一
茉方之巻終